

# 僕らは親として

大島 行雲

遠くで歌が聞こえる。距離的な遠さじゃない。意識の遠さ。白濁とした霧の向こうに霞む様に低い歌声が流れている。日本語の歌で、勿論、どの単語も全て知っているのに意味は一つも頭に入っていない。ただの音。それが徐々に徐々に油が固まるといく様に意味を取り戻し始める。意識が水の底からゆっくりと浮き上がって、その歌声を掴み取る。まだ指の間から砂粒の様に零れ落としながら。

比呂は、ぼんやりと瞼を開いた。

いつの間にか眠ってしまったらしい。お気に入りのコンボで聴いていた平原綾香のアルバムの歌声が心地良かったから、それとも、単に疲れていただけなのか。

青臭さの残る畳の上で寝返りをうってうつ伏せになり、畳んで枕にしていた座布団に両肘を乗せて頬杖をつく。確かに彼は疲れていた。教師になってから、もう何年になるだろう。未だに生徒が掴めない。経験さえ積みばと思っていたが、何年経っても良くなるどころか益々分からなくなっていて、自信を失っていかばかり。卒業式シーズンになると先輩教師だけが毎年と言っていていくらい生徒から花束やらプレゼントやら貰っているの

を見ると、自分の不甲斐なさが嫌になる。

「考えるな、考えるな」

声にはならない声で呟くと、勢いをつけて彼は立ち上がった。寝室を出て居間へ向かう。妻が夕食の支度をしている音に、娘の話し声が混ざり合っている。

「あ……起きたんだ」

寝癖ができていないか気にして後頭部を撫でる彼に、表情を変え事なく妻が淡々と言う。妻は大手レコード店の店員だ。今日はこれから出勤なので、いつもより早く台所に立っていた。彼は学校では男女平等を生徒に教え、学校の名簿は男女混合なのに、結局、彼の家で食事を作るのは旧態依然として殆ど妻だ。料理が上手いからだと思っ事になっているが、男の言い訳に過ぎない気もする。ひどく細く小柄な身体に黒いエプロンをした妻の後ろ姿を見て、楽させてやれない自分の不甲斐なさを思う。「知ってたんなら起こしてくれてよかったのに。CDもかけっぱなしだし」

「別に起きる必要ないでしょ。休みなんだから。CDかかってる方が子守歌代わりになりそうだったし」

「パパ、子守歌だつてえ」

さっきまでテレビで猫が鼠が分からない妙なぬいぐるみが饅頭を頬張っている番組を見ていた娘が、いつの間にか夫婦の会話に意味も分からず入り込んでくる。邪魔だとは思わない。

寧ろ心地好い。世代間の差を平気で飛び越えて懐に入ってくる天真爛漫さは、子供だけが持つ特殊能力だと思う。だが、それも年を経る毎に弱まって、いずれは教師と生徒の間に冷たい壁を築き上げる。

前に娘が無邪気に笑って話してくれた話を思い出す。小学校のクラブ活動取材しに来た地方紙の記者に明るく答えた娘の友達は、記者が帰った後に言ったらしい。

「ああ話した方が喜ぶでしょ」

ぞっとした。悪気はないのだ。善意と言ってもいい。でも、自分が小学生の頃、そんな事を考えたりしただろうか。様々な意味で成熟した子供達を、教師は相手にしなければならない。娘の担任教師もまた、そう思ってるだろうか。

テレビは子供番組が終わり、ニュースが始まっている。行方不明になっていた栃木の小学校一年生の女の子が、茨城の山中で遺体となって発見された事を伝えていた。やりきれなくなつてテレビを消す。

様々な意味で道を踏み外した大人達を、今の子供達は相手にしなければならない。

彼もまた、その一人なのか。

この国には、自分の娘と同じ年頃の女の子に異様な妄想を抱いて手にかかる男がいる。許せない。でも、通勤電車や職場でミニスカートの女子高生を見ると意識してしまう自分がいる

のも知っている。どこまでが許されて、どこからが許されないのか。彼はキリストにはなれそうにない。

ちらかった居間の一角で娘はぺたんくと床に座り込み、分厚い本を読んでいた。『ハリー・ポッター』の最新巻だ。誕生日プレゼントにねだられて買ってあげたそれを、娘はもう二度も三度も読み返していた。

「そう言や、今、映画もやってるんだよな」

言つと、娘が目をキラキラさせて本から彼に視線を移す。  
「行きた〜い」

余計な事を言つた。連れて行ってやりたいとは思つ。時間と金に余裕があれば。今の子供には金がかかりすぎる。塾やピアノや水泳の習い事だけでなく、遊ぶ玩具もゲーム機を代表として高価なものばかりだ。その上、映画となれば、家族で行くと三人分の料金がかかる。無視できない出費だった。

「でも、今度の映画も、この本二冊分、二時間でやるんだよ。なんかちよつと心配。この前も私が一番好きな場面、全然短かつたんだもん」

「原作の映画化つてのは、そんなもんだよ。全部そのまま映画化したら、メチャメチャ長くなっちゃうだろ」

「そうだ。本、返しにいかないよ」

突然、後ろで妻が言った。

「返しに、これ、この前、買ってやったのだろ」

「そうじゃなくて、他に借りてる本があるの。今日が期限だったんだ。麻由、連れて、返しに行ってくれる？」

「今から？」

「私、手、離せないから」

訊くまでもなかった。馬鹿な質問をした。近所の図書館に本を返しに行くぐらいなら、もう小学校四年生の娘一人で行けそうなものだが、何せ物騒な世の中だ。親がない時間ならともかく、父親がいるのなら一緒に行った方がいいだろう。親子で散歩ついででも悪くない。

「じゃ、行くか？ 麻由」

「うん」

「で、その本って、どれなんだ？ 返すの」

娘が小さな歩幅で居間を横切り自分の机へ向かうと、一冊の絵本を持って彼の所に戻ってきた。

「『お月さまに恋したスッポン』？ 何だか変わった題名だな。

どんな話？」

「う〜ん、スッポンが月を好きになって追いかけるの」

「そのまんまだな。追いかけても無駄だろうに。何か『よだかの星』、思い出すな。そんな話じゃなかったっけ？」

「ヨダ？ わかんない」

「『よだかの星』。宮沢賢治だよ。お前はまだ読んでないか」

「いつまでも喋ってないで」

妻に注意され、彼は開いて読み始めようとしていた娘の絵本を閉じた。絵本を娘に返し、寝室に戻って洋服筆筒からジージャンを出して羽織る。居間に戻ってみると、娘が絵本を開いて読み始めていた。

「ほら、行くぞ」

「うん」

脱いだまま放置されていた娘の白いジャンパーを拾い上げる。絵本を閉じた娘は一度それを床に置いて、彼からジャンパーを受け取って着ると、また絵本を手を持った。

小さな手。握れば、潰れてしまいそうだ。

「いいか？」

「うん」

「じゃ、行ってくる」

「いつてらっしゃい：：あ、そうだ。帰りにマーガリン、買ってきてくれる？ そろそろなくなりそうだから」

「オッケー。マーガリンね」

履き古したスニーカーに足を突っ込み、玄関の扉を開けて娘が出てくるのを待つ。

「いつてきまーす！」

幼く高い声を娘が家の中に投げ込んで、母親の返事も聞かず小走りに出てきた。扉を閉め、鍵をかける。どうせ家の中に妻はいるし、自分もすぐに帰ってくる。鍵など必要ないかもしれ

ないが、物騒な世の中だ。用心に越した事はない。

娘と二人、連れ立って夕方の町を歩く。近所の畑だった土地が掘り返されて、不動産会社の「分譲中」の看板が立っている。

「また新しい家できるんだな」

娘は土地を見ても何も答えない。彼女に畑がなくなる意味が分かるだろうか。多分、関心があるとすれば、建てられた家に住む家族に子供がいるか。いるとすれば友達になれそうな子か。そんなところだろう。

空は、とても薄い青だ。空色と言えるほど青くない。でも、白くもない。白に僅かに青を溶かした様な、どっちつかずの色。片隅にできそこないの鯛雲が消え入りそうに浮かんでいた。それらが日の光を失いかけて、僅かに黒ずみ始めている。

娘が何か頻りに喋っていた。本を斜め読みする様に端々を聞いて理解し、当たり障りない反応をする。蔑ろにしているつもりはない。子供の話は自分の現実を忘れさせてくれる。子供がいるから不自由な事も多かったが、彼女がくれる短い一瞬一瞬は、それを補って余るほどに彼を温かい気持ちにさせてくれた。ただ、いつも子供に集中し続けてはいられないだけだ。でも、後ろめたくもある。だから、せめて笑顔で接しようと思ひみる。横断歩道の前に来た。赤信号で二人は歩を止める。車は走ってこない。向こうから来た一人の大人が、それを確かめて、赤信号のまま渡ってきた。平然と二人の横を通り過ぎていく。

「……お父さん、あの人、信号無視してたよ」

「……うん……」

すぐには何も答えられない。

「いけないんだよね。学校の前で信号無視した男子、先生にすぐい怒られてた」

彼も隣に娘がいなかったら、渡っていたかもしれない。彼もまた一人の大人で、ましてや一人の先生でもあった。

「うん……信号っていうのは……赤だから渡っちゃいけないんじゃないんだ。うん……何て言うか……危ないから、渡っちゃいけないんだ。だから、青でも渡っちゃいけない時もある……今は、麻由子は、まだ色んな事を勉強中で分かんないから、赤信号は渡っちゃいけないけど、いつか自分で考えて、自分で決めて、自分で責任を取れるようになったら、そうじゃないって考えるようになるかもしれない」

「ふん……」

自分は間違えた事を教えているだろうか。守るべき事を守らなくてもいいと教える不屈きな大人で不屈きな教師だろうか。でも、信号を守らない大人は確実に存在する。自分もまた。あどけない娘の横顔を見下ろす。

「……信号が赤でも青でも紫でも、俺は麻由子の味方だけだな」  
「ええっ！ 信号に紫なんてないよ」

娘が笑う。彼も、それ以上、何も説明しない。

次の信号は何色だろう。